

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三號

第十卷

論 說

累進課税の根據に就きて

法學博士 神戸 正雄

貯穀と常平倉

法學士 本庄榮治郎

勞賃の最大點及び最小點

法學博士 田島 錦治

基礎社會衰耗の法則

文學士 高田 保馬

植民地財政政策(二)

法學博士 山本美越乃

マルクスの勞働價值論の根本命題に就て(二・完)

經濟學士 堀 經夫

時事問題

米國の海運政策に就て

法學博士 戸田 海市

我が最高經濟政策と海運政策

法學士 小島昌太郎

雜 錄

比律賓の貿易と海運

法學士 小島昌太郎

マルクスの勞働價值論の根本命題に就て(二・完)

堀 經 夫

二 『社會的に必要なる勞働(時間)¹⁾』の意義

以上述べたる所により、マルクスの所謂價值と交換價值とは別種概念であるといふこと、並びに一商品の價值は其生産に費されたる抽象的人間勞働の分量に依つて定まるといふことは、既に明白になつたことと思ふ。扱て次に起つて來る問題は、然らば商品の價值の大小を決定する所の勞働の分量は何に依つて之を測定するかといふこと、及び如何なる人の支出に成る抽象的勞働が價值決定の標準となるかといふことである。

マルクスは、第一の問題に對しては、極めて簡單に次の如く答へて居る。

「……然らば、此價值の大きさは如何にして之を測るか。曰く、使用價值の中に含まるゝ「價值形成實體」即ち勞働の分量に依つて之を測る。勞働の分量は、其時間²⁾に依つて測られ、勞働時間は、また時、日等の如き一定の時間部分を標準とするのである。」

是に由て觀れば、マルクスは、勞働の支出さるゝ時間、即ち勞働時間を以て、勞働の分量を測定する單位、從て價值の大小を決定する單位となしたることが、明かである。此思想は、アダム・スミス、リカード³⁾等に於て既に其萌芽を發して居る所のものであつて、最も自然的にして且つ單

1) Die gesellschaftlich notwendige Arbeit(zeit).
2) Marx, Das Kapital, I. (1919) S. 5. 高島氏譯本(九頁)に據る。

純なる考へ方である。例へばスミスは次の如く言つて居る。

『通例二日の、又は二時間の労働の生産物である所のものは、通例一日の、又は一時間の労働の生産物である所のもの、二倍の價值がある、と云ふは自然である。』¹⁾

果して、スミス、リカード、マルクス等の考ふる如くに、爾かく單純に此問題を取扱ふことを得るや否やは、——利子、利潤の問題にも關係して來るが故に——極めて興味ある問題であるけれども、余は姑らく之を措き、直ちに第二の問題に移るであらう。

第二の問題とは、如何なる人の支出に成る人間労働が價值決定の標準となるか、といふことである。惟ふに此種の疑問が提出さるゝ所以のものは、既にマルクスの言へる如く、『一商品の價值が、其生産中に支出された労働の分量に依つて定まるとすれば、人が怠惰であればある程、或は不熟練であればある程、それを造り上げる爲にそれ丈多くの時間を要するから、彼れの作る商品はそれ丈價值多いやうに見える』²⁾からである。マルクスは、之に答へて次の如く説明して居る。

『然しながら、價值の實體を形成する労働とは、等一なる人間労働、(即ち)同一なる人間労働力の支出、の謂である。商品界の諸價值の中に表現される社會の總労働力は、無數の個人的労働力から成り立つて居るが、茲では總て一樣なる人間労働力と看做される。そして之等の個人的労働力の各箇は、それが社會的平均労働力たる性質を有し、又斯の如き社會的平均労働力として作用し、隨つて一商品の生産に於て單に平均的に必要なる、若くは社會的に必要なる労働時間のみを必要とする限り、いづれも皆同一なる人間労働力である。そして其社會的に必要なる

1) Adam Smith, *Wealth of Nations*, Cannan's edition, p. 49. Ricardo, *Principles*, Gonnor's edition, p. 7.
 2) Marx, *Das Kapital*, I, S. 5. 高島氏譯本(九頁)に據る。
 3) 高島氏譯本には、同。様。とあり。
 4) 引用者補入

勞働時間とは、現在の社會的、標準的生產諸條件と、勞働の熟練及び能率の社會的平均程度とを以て、何等かの使用價值を表現するに要する勞働時間を指すのである。」

即ちマルクスは、商品の價值の實體をなす勞働は等一なる抽象的人間勞働であるが、同種類の商品と雖も、必らずしも此の等一なる人間勞働の同一分量を含有して居るとは限らないことを認めた。然しながら、商品は社會的產物である、といふ點に彼は着目して、同一種類の商品は、——その各個の商品は、各々異なる分量の人間勞働を含有せるにも拘らず、——社會的平均勞働によつて（即ち現在の社會的、標準的生產諸條件と、勞働の熟練及び能率の社會的平均程度とを以て、其商品を生産するに必要な人間勞働の分量によつて）價值付けらるゝものなることを主張したのである。斯くて同一種類の商品は、一定の時及び處に於ては、其生産のため社會的に必要である所の勞働時間によつて測定されたる、同一大さの價值を有することゝなり、假ひ怠惰なるか或は不熟練なる勞働者によりて生産されたる商品がより多くの勞働時間を含有して居ても、それはより大なる價值を有し得ざることゝなつた。

要するにマルクスに従へば、商品の價值の大小を決定するものは、個々の商品の生産に實際必要である所の個々の、勞働者の勞働の分量にあらずして、社會的に必要なる勞働の分量、即ち其生産に於て技術上社會的に必要なる勞働時間に外ならないものゝ如くである。斯くて勞働の生産力が變化すれば、社會的に必要なる勞働時間も變化し、價值も亦隨つて變化することゝなる。

以上は、價值決定要素としての「社會的に必要なる勞働（時間）」の意義であるが、こは、マル

1) Marx, Das Kapital, I. S. 5. 高島氏譯本（九頁乃至一〇頁）に據る。

クスが、主として『資本論』第一卷に於て説明したる所のものである。然るに、進んで『資本論』第三卷を検するに至るや、吾々は、『社會的に必要なる労働(時間)なる概念に、必らずしも常に、上に述べたる如き意味のみが附せられ居らざることを、換言すれば、此概念に更に擴延されたる意義が附せられ居ることを、發見するのである。

マルクスは次の如く言つて居る。

「商品が、その市場價值で賣却さるゝが爲めには、即ち其中に含有されたる社會的に必要なる労働の分量に比例して賣却さるゝが爲めには、此種の商品の全量に費され居る所の社會的労働の全量が、其商品に對する社會的欲望の分量に、即ち購買力を有する社會的欲望の分量に適應しなければならぬ。」又曰く、

「假ひ各々の個々の品物、或は或種の商品の各一定の分量は、その生産に必要とさるゝ社會的労働を含有するに過ぎないであらうとも、而して又、此點より觀察すれば、此種の全商品の市場價值は必要なる労働を表はして居るに過ぎないであらうとも、而かも其一定の商品が現實の社會的欲望に超過するやうな分量で生産さるゝならば、社會的労働時間の一部分は浪費され、而して其商品の全量は、事實上それに含有され居るよりも遙かにより少量の社會的労働を市場に於て代表して居る。……それ故に、此商品は、その市場價值以下にて賣り捌かれなければならない。——若し或一定の種類の商品の生産に費されたる社會的労働が、その生産物によつて満足さるべき特種の社會的欲望の大きさに比して餘り

に小であるならば、之と反對の結果が生ずる。——併し乍ら、一定の品物の生産に費さるゝ所の、社會的勞働の範圍が、満足さるべき社會的慾望の範圍に適應し、斯くて生産されたる分量が、變らざる需要の下に於ける再生産の普通の標準に適應するならば、商品はその市場價值で賣却さるゝ。』(註參照)

(註) 本引用文中に於て、マルクスは、市場價值なる語を使用して居るが、吾々は、此言葉と價值といふ言葉との意義に就て一應穿鑿して置く必要がある。マルクスは、市場價值なる概念に次のやうな説明を加へて居る。曰く、

『市場價值は、一方に、一(生産)部門内に於て生産さるゝ商品の平均價值として觀察さるべきであり、他方に、其部門の平均的諸條件の下に於て生産され、而して同部門の生産物の大部分を占むる所の、その商品の個々の價值として觀察さるべきであらう。』³⁾

是に由れば、市場價值とは、同一種類に屬する商品の各々の價值を平均したもの、換言すれば、平均的生產諸條件の下に於て生産されたる代表的商品の價值を謂ふものゝやうである。併し乍ら、吾々の注意すべきは、既に述べたる如く、マルクスの所謂一商品の價值は、決して其商品の生産に實際に費されたる人間勞働の分量によつて決定さるゝものにあらずして、其種類に屬する商品を生産するに社會的に必要なる勞働(時間)の分量、即ち平均的生產諸條件の下に於て必要とせらるゝ勞働(時間)の分量によつて決定さるゝものであるから、一部門内に於て生産さるゝ同種類の商品の諸價值を平均することは、最初より不可能であり、従てマルクスの所謂市場價值は、彼れの所謂價值と全然同一なる概念でなければならぬ、といふことである。

此等の文字より察するとき、商品が賣却されて其市場價值を、即ち其商品中に含有され居る社會的に必要なる勞働の分量を、實現するが爲めには、その社會的勞働の分量が其商品に對する社會的慾望の分量に適應しなければならぬ、といふことを、マルクスは明かに認めて居るのである。

1) Marx, Das Kapital, III. I. S. 166-167.

2) 譯者挿入

3) Marx, Das Kapital, III. I. S. 157.

更に彼が、労働は必要労働と剩餘労働とに分れるけれども、社會といふ立場から見ると、農業に於けると工業に於けるとを問はず、それは要するに商品を生産するに必要な労働であることを論じ、それに續けて、

『それは特定物の生産に、——特定物に對する社會の特定の欲望の満足に、必要な労働である』¹⁾と言ひ、又數行を隔て、

『……使用價值の有無は、個々の商品に就て言ふならば、そがそれ自體で以て一つの欲望を満足するか否かに依つて定まるものであるが、社會的生産物の集團に就て言ふならば、使用價值の有無は、その集團が各種特定生産物に對する、分量的に一定せる社會的欲望に適應して存在して居るか否かに依つて定まり、而してそれ故に、労働が、分量的に限定され居る所の、此社會的欲望に比例して、異なる生産部門に釣合よく分配され居るか否かに依つて定まる。』²⁾

と言へるを見るに及んで、吾々は、彼れの所謂『社會的に必要な労働(時間)』なる概念の中には、特定物の生産に必要な労働のみならず、特定物に對する社會の特定の欲望の満足に必要な労働と云ふ意味が含有され居ることを發見するのである。

是に於て、マルクスを評釋する學者の多くは、マルクスの所謂『社會的に必要な労働(時間)』なる概念に二義ありとなし、即ち一は商品の生産に當つて社會的に必要な労働(時間)を意味し、他は商品の流通に當つて其商品に對する社會的需要を充たすに必要な労働(時間)を意味するものと解して居るのである。併し乍ら、此等兩義を認むる學者の中に在りても、(A)マルクスは、此等

1) Marx, Das Kapital, II. II. S. 175.

2) Marx, Das Kapital, III. II. S. 175-176.

兩者を以て共に商品價值決定の要素となしたり、となすものと、(B) マルクスは、其中の一を以て價值決定の要素となし、他は價值實現の要素に過ぎずとなしたり、とするものとの二派がある。以下此等兩派の學者の説を列舉し、最後にマルクスの眞意が何れに存したるかを檢することとする。

A) ブーダン¹⁾は、其著「カアル・マルクスの理論的體系」に於て、次の如く述べて居る。

『……新しい價值を創造する爲めに或品物の生産に費されたる労働は、かゝる品物の生産に對して平均的支出をなすことによつて生産的なりしのみならず、社會にとつて必要である所の何物かを創造したに違ひない。……(中略)……若しも一定の商品の餘り多くが生産さるゝならば、絶對的に多過ぎるのではなくて、現在の社會狀態並びに社會關係に比して多過ぎるのである、——かゝる生産は、何等餘分の價值を創造しない。それ丈の労働(即ち多過ぎた丈の労働——譯者註)は浪費されて居る。……價值は社會關係であるから、此種の品物の生産に費されたる總ての労働は、社會に於ては、比例的により少ない價值を生産するのであらう、各品物は、それ丈より少い價值を有つであらう、從て生産されたる斯かる品物の合計は、若し其労働(即ち餘分の労働——譯者註)が費されず而して餘分の品物が生産されなかつたとする其場合よりも、決してより多くの價值を有たないであらう。(中略)』

換言すれば、一商品の價值は、社會がそれを要求する場合に、社會が必然的に其生産に支出しなければならぬであらう所の、その労働の分量に依つて決定せらる、別言せば、其再生産に社會的に必要な労働の分量に依つて決定せらる。』

1) Boudin, Theoretical System of Karl Marx, 1918, pp. 69-70.

即ちブーダン¹⁾は、商品の價值を決定する所の労働に、第一に、其商品の生産に對して技術上社會的に必要である所の労働といふ意味と、第二に、社會が必要とする其の分量に於て生産さるゝ商品に費さるゝ労働といふ意味との兩義を含ましめ、而して此兩者が相俟たなければ商品の價值は決定されざるものと解したのである。マルクスを斯の如く解釋せる學者は頗る多いのであるが、次に其中の二三者の所説を瞥見するであらう。

バウル・フィツシアは、其著『マルクスの價值説』に於て、次の如き結論を下して居る。

『社會的に必要なる労働とは、社會的使用價值を創造する所の、社會的に通常なる生産諸條件の下に於て實行さるゝ所の、及び最後に、全需要に適應する分量に於て其生産物に支出さるゝ所の、その労働をいふ。此意味に於ける社會的に必要なる労働は、同時に、——商品を生産しつつある社會の内部に於ては、——價值を形成する労働である。』

『……人は、社會的に必要なる労働時間を以て、生産物の生産に一般的に必要な分量の労働時間を意味するものと誤解して居る、——此種類の全生産物が、社會的需要に適應するや否やを顧慮することなしに——』²⁾

又シエフレーは、其著『社會主義の真髓』に於て、次の如く述べて居る。

『……第一次的の隨意的私人的労働が價值を決定するのではなくて、『社會的に必要なる労働』が、即ち生産物を全需要の大さ丈生産する爲めに、社會的技術の一定の狀態に従つて、一單位の需要に對して平均的に支出されなければならないやうな、そんな範圍の労働が、價值を決定する。』

1) Paul Fischer, Marx'sche Werttheorie, 1907, S. 19.

2) Fischer, a. a. O., S. 45.

するのである。¹⁾』

ベルンシュタインは、其著『社會主義の歴史及び其理論』に於て、又同様の意見を述べて居る。

曰く、

『吾々の既に見たるが如く、經濟上の價值は、二重の性質を有つて居る、それは效用（使用價值、需要）の要素と、生産原費（勞動價值）の要素とを含有して居る。此等の要素の中何れが價值の大小を決定するか。確かに其一方である或は他方である、といふことは出来ない。マルクスも亦、色々な場所で、此事を認めて居る。實に彼は、價值を決定する所の、社會的に必要な勞動時間なる概念の中に、需要の要素を引き入れることに力めて居る。此概念は、彼に依つて、一商品單位を通常の生産上の技術を以て産出するに要する勞動時間の意味、並びに該商品を、市場が要求し而して之を吸収することが出来る丈の量に於て、産出するに要する勞動時間の意味に用ひられて居る。』

以上は、マルクスを以て、その所謂『社會的に必要な勞動（時間）』なる概念中に含まるゝ兩義が、共に價值決定の要素となることを主張したものと解する學者の例であるが、此等の諸説を要約するならば、次の如き主張となるであらうと思ふ。商品の價值を決定する所の、『社會的に必要な勞動（時間）』とは、通常の生産條件（即ち普通最も流行して居る所の生産用具と、普通に要求する労働者の勤勉と熟練とを意味す）の下に於て、社會が需要する所の分量だけ、或商品を生産するに必要な勞動時間を云ふ、とマルクスが論じたりとなす主張、即ち是である。

1) A. Schäffle, Die Quintessenz des Sozialismus, 1906, S. 45.

2) E. Bernstein, Zur Geschichte und Theorie des Sozialismus, 1901, S. 368-369.

然らば此主張の根據は何れに在るか。詳言すれば、商品の生産に技術上社會的に必要である所の労働も、若しその商品を、それに對する社會的需要以上に或はそれ以下に生産するならば、此商品は、其労働の分量の割合より以下の或はそれより以上の價值を有しなければならぬ、といふは何故であるか。彼等曰く、其根據はマルクスの言そのものに在る、マルクスは「如何なるものも、使用價值たることなくして、價值たり得ない」と云つて居るではないか、然らば、技術上社會的に必要なる労働時間によつて生産せられたる商品も、例へば若し社會的需要以上に生産するならば、その餘分の分量は、何等使用價值を有し得ず、従つて價值たり得ないのである、是れ、社會的に需要さるゝ商品分量を生産するに必要な労働が、其商品の價值を決定す、といふ所以である。これ果してマルクスの真意を傳へたものであらうか、以下研究する所により、此點は漸次判明することゝ信ずる。

(B) ペツリーは、其著「マルクス價值説の社會的内容」に於て、次の如く言つて居る。

「社會的欲望といふ公式が加はつても、それによつて交換關係は毫も變更されない。その限りに於て、技術的に必要なる分量の労働のみが常に重要である、この解釋は正しい。併し社會的に必要なる労働といふ言葉の、かの曖昧なる兩義の裡に隠れて居る所のものは、其下に於て此交換關係が實現さるゝ所の、其諸條件を、より正確に言ひ表はしたものである、即ち社會的に必要なる労働は積極的に作用する原因ではなくて、競争の諸動搖の中に在つて獨り動かさる所の結果である。」²⁾

1) Marx, Das Kapital, I. S. 7.

2) Franz Petry, Der Soziale Gehalt der Marxschen Werttheorie, 1916, S. 52.

即ちベツリは、マルクスの所謂價值は商品の生産に技術上社會的に必要なる労働時間の大小によつて定まるものなることを飽くまで主張し、商品に對する社會的需要を充たすに必要な労働時間なる概念は、たと商品の價值を實現する——價格として——に際し、その大きさを變更するの力を有するのみなることを、或は同じ事柄を逆に言ひ表はすならば、商品が其價值で賣却さるゝ爲めの其條件を決定するに過ぎざることを、論じて居るのである。斯かる議論は、之をグリゴロヴィチの所說中にも發見することが出来る。彼曰く、

『商品の市場價值は、此商品に對する社會的欲望とは全く關係がない。市場價值は絕對的に技術的要素によつて決定され、而して社會的欲望は市場價值の實現に際してのみ、即ち其下に於てのみ商品が其市場價值で賣却され得る所の、其諸條件の決定に際してのみ、關係を有つて来る。』

『社會的に必要なる労働時間』なる言葉を以て、マルクスは、第一に商品の生産に技術上に必要なる労働時間を、第二に社會が生産物に對するその欲望を満足する爲めに消費するそれ丈の分量を産出するに當つて、社會が各特定種類の生産物に支出しなければならない所の、その労働時間の大きさを、言ひ表はすものとなして居る。こは、多くの人が兎角信じ勝ちであるやうに、一つの而して同じ概念に對する二つの異なる定義ではなくして、却つて二つの異なる概念に對する一の而して同じ名稱である。

マルクス自身は、此二種の社會的に必要なる労働を嚴密に區別して居る。彼に依れば、吾々の既

1) Tatiana Grigorovici, Die Wertlehre bei Marx und Lassalle, Marx-Studien, Bd. III. 1910, S. 517.

に見たる如く、同一商品も同時に、第一の意味に於ける社會的に必要なる労働時間と、第二の意味に於ける労働の、社會的に必要なるより、より多く或はより少く、を、含有することが出来る。即ち斯かる場合は、商品が通常の生産諸條件の下に於て生産されても、而かも満足さるべき、此商品に對する社會的需要の分量に超過し或は之に不足するやうな數量に於て生産さるゝ時に起る。……技術上の意味に於ける社會的に必要なる労働は、一個の價值決定要素であるが、社會の全労働時間を釣合よく、數量的、社會的欲望に適應するやうに、各種の生産部門に分配する、といふ意味に於ける社會的に必要なる労働時間は、商品の價值の大きさに全然何等の影響をも有たない。此意味に於ける社會的に必要なる労働は、商品集團の價值の前提、即ち使用價值であるといふこと、がそれに懸つて居り、従つて價值の實現がそれに懸つて居るといふ限度に於てのみ、價值法則に關係をもつて居る。』

是に由て觀れば、グリゴロヴィチも明かに、マルクスが『社會的に必要なる労働時間』なる言葉に附したる兩義中、第一のものゝのみが商品の價值を決定し、第二のものは價值の實現に當つて意味をもつて來るに過ぎない、と解するのが、マルクスの眞意を得たるものとなして居る。然らば、何故に第二の意味に於ける『社會的に必要なる労働』が、價值の實現に當つて意味をもつのであるか。他なし。先に、マルクスの所謂『社會的に必要なる労働』の有する兩義が、共に價值決定の要素なることを主張せる學者が、其主張の根據となしたると正に同一の根據によるのである。蓋し、如何なるものも使用價值たることなくして價值たり得ない、といふマルクスの根本思想に

本き、例へば社會的の需要がない部分の商品は、本來その生産にどれ程の勞働の分量が費されてあつても、それ丈の價值を實現し得ないが故である。

以上を以て、マルクスの所謂『社會的に必要なる勞働(時間)』なる概念の有する兩義に對する二派の學者の所論を比較したたのであるが、之に關連して吾々の注意し置くべきは、商品^の價值と其價格との關係である。蓋し此等二派の學者中、前者に屬するもの、説に従へば、價值と價格とは之を區別するの必要なく、而して後者に屬するもの、説に依れば、價值と價格とは之を區別することが甚だ必要にして、且つ意味あることとなるが故である。今次に其理由を簡單に説明するであらう。

フーコー・ランデは、前記A)の學説を奉ずる學者なるが、彼は價值と價格とに關連して次の如く述べて居る。

『……生産過剰が起るならば、其時は「社會的に必要なる勞働」が支出されて居ないのである、かくて全生産物は、通常の生産に當つてより少量の生産物集團が含有したであらうと正に同量の價值を含有するに過ぎぬ、換言すれば、價格は生産物中に結晶したる、事實上支出されたる勞働時間に適應せずして、その生産物中に結晶したる、社會的に必要なる勞働時間に適應する、價格は價值法則に従ひたる生産物の價值に全然適應する、——價格と價值との差といふことは、茲では全然問題にならぬ。』¹⁾

1) Hugo Landé, Mehrwert und Profit, Die Neue Zeit, XI. 1. 1893, S. 590.

即ちラッデの所説を約言するならば、商品の價值は、社會が需要する丈の分量の商品を生産するに必要な普通の労働時間によつて決定さるといふのであるから、其商品の供給が需要に一致するといふことが、價值決定の前提条件となり、此事は取りも直さず、價值と價格——價格とは商品の價值を貨幣にて言ひ表はしたものであつて、即ち市場の需要供給關係によつて決定さるゝ所のものである——とは當然合致すべきものなることを示して居る、といふのである。是れ蓋し理の當然であらう。

之に反し、商品の價值は其生産に技術上社會的に必要な労働時間によつてのみ定まるとなすものに在つては、商品の供給がそれに對する社會の實際の需要に偶然的に一致せざる限り、價值と價格とは一致せざるものなりと主張するが當然である。蓋し、例へば生産過剰の場合に在つては、各商品は其生産に技術上社會的に必要な労働によつて生産され、それに相當する價值を有つて居ても、價格として實際に交換さるゝ場合には、需要供給の法則に従ひ、それ丈の價值を實現することが出来ないが故である。

是に於て、吾々は、マルクスの所謂「社會的に必要な労働時間」の含有する兩義に對する二種の見解の差異を愈々明かに知ることを得たのであるが、次に起る問題は、然らばマルクス自身の眞意は何れに存したりやといふことである。

余は此點を研究するに當り、檢索の便宜上、マルクスが價值と價格とを如何に取扱ひたるかを見、これに依つて彼れの意を忖度することとする。

マルクスは、價值と價格とが一致するの要件につき、『資本論』中數ヶ所に於て説明を下して居

る。其一例を示すならば、彼は『資本論』第三卷に於て、次の如く述べて居る。

『其の大きな商品が互に交換さるゝ所の、その價格が、商品の價值に近似的に適應するが爲めには、次のことが必要であるのみである、第一に、各種商品の交換が、純粹に偶然的のものであることを、或はほんの偶然の機會から行はれるものであることを止めること、第二に、吾々が直接の商品交換について觀察して居る限り、此等の商品が相互に、相互の欲望に近似的に適應する相對的數量に於て生産さるゝこと、此事は相互の商賣上の經驗が教へ、而して斯くて交換を斷えずやつて居れば、自らその結果として生じて來る所のものである、そして第三に、吾々が賣却について論ずる限り、自然的獨占又は人工的獨占が、賣買契約者の一方の側をして價值以上で賣ることを得しめ、或はそれ以下に賣却することを餘儀なくせしむるやうなことがないこと、即ち是である。』¹⁾

『異なる生産部門の諸々の商品が、その價值通りに賣らるゝとの假定は、勿論單に、その價值が引力點であつて、その周圍をその價格が廻轉し、而して此の價格の斷えざる上下への變動をその中心點に一致せしむる、ことを意味して居るに過ぎない。』²⁾

是に由て觀るに、マルクスは、價值と價格とが必らずしも一致するものにあらざること、換言すれば、價值は商品の需要と供給との合致せる場合に定まるものにあらざること、明かに認めたのであつて、其結果として吾々は、マルクスが商品の價值決定の要素として『社會的に必要なる勞働』と云へる中には、毫も商品に對する社會的需要の要素が含有され居らざることを知し得るのである。實にグリゴロヴィチの言ひし如く、マルクスの所謂『社會的に必要なる勞働(時間)』

1) Marx, Das Kapital, III. 1. S. 156-157.

2) Marx, a. a. O., S. 157.

は、同一概念——(即ち價值決定要素としての概念)——に對する二つの異なる定義ではない、それは二つの異なる概念——(即ち價值決定要素としての概念と價值實現要素としての概念と)——に對する同一の名稱なのである。

エンゲルスが、マルクスの著『賃傭勞動及び資本』の序文に於て、

『經濟學は、總ての商品の價值が、斷えず變化するの事實を發見する、價格が種々雑多の事情——それは屢々商品の生産自體と全然無關係である、——に従つて騰貴し下落するので、價格は普通、純然たる偶然によつて決定さるゝやうに見えるといふことを發見する。今や經濟學が一の科學として現はるゝことゝなるや、此の、一見商品の價格を支配しつゝある偶然事の裏面に隠れて居る所の、そうして又、事實上は此偶然事自體を支配して居た所の、その法則を檢索するのが、その第一の仕事であつた。斷えず或は上に或は下に動搖して居つた商品の價格の中に於て、經濟學は、其周圍を此等の動搖が運動して居つた所の、固定せる中心點を求めた。一言以て覆へば、經濟學は、諸商品價格より出發して、その支配法則として商品價值を求めた、それよりして總ての價格動搖が明白となり、動搖は總て結局に於てそれに再歸すべきものとなつた。』

と言へるが如き、又マルクスが一八六八年七月一日にクーゲルマンに宛てた書簡中に於て、

『俗經濟學者は、實際上の日々の交換關係(價格を指すものと見て差支なかるべし——譯者註)

と價值の大きさは、直接に同一であり得ないといふことに、毫も感付いて居ない。』²⁾

と言へるが如き、長くマルクスの意見を表明して居るやうに思はるゝ。

終

1) Engels, Einleitung, Karl Marx, Lohnarbeit und Kapital, (1919) S. 8-9.
2) Sieh, Die Neue Zeit, XXI. II. 1903, S. 359. und Die Neue Zeit, XX. II. 1902, S. 222.